

今帰仁村文化財調査報告書第34集

古宇利原B遺跡発掘調査報告書

—村道古宇利線事業・店舗建設に伴う緊急発掘調査報告—



平成27年(2015)2月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁村文化財調査報告書第34集

古宇利原B遺跡発掘調査報告書

－村道古宇利線事業・店舗建設に伴う緊急発掘調査報告－

平成27年(2015)2月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

序 文

本報告書は、今帰仁村字古宇利における「店舗建設工事」、「村道古宇利線事業」に伴って実施された埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果を収録したものであります。

発掘調査は平成25～26年度に行い、調査終了後、資料整理を実施しました。今回調査の行われた古宇利原B遺跡は小字名古宇利原の東側集落はずれの畑地に形成されており、農耕機械等による耕耘により現況を著しく破壊されておりましたが、それでも多くの成果を得ることができました。特に今帰仁村における貝塚時代の様相の一端をつかめたことは大きな成果であり、今回出土した文化財は、我々の祖先たちの生活や文化環境を知る上で貴重な歴史資料であります。

本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待します。

おわりに、発掘調査の場を提供いただきました地主の平松季哲氏、株式会社たこ満、村建設課関係各位、調査指導、報告書作成等で協力をいただいた諸先生方、また調査に参加協力くださった古宇利島の方々に記して御礼を申し上げます。

平成 27(2015)年 2月

今帰仁村教育委員会
教育長 新城 敦

例 言

1. 本書は平成 25年度および平成 26年度に今帰仁村が実施した下記 2 事業に伴う緊急発掘調査の内容を記録したものである。
 - ①村道古宇利線事業に伴う緊急発掘調査
 - ②店舗建設に伴う緊急発掘調査
2. 本書に収録した遺跡は、沖縄県今帰仁村字古宇利 314番地ほかに所在する。
3. 発掘調査及び整理作業にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。

金武正紀(今帰仁城跡整備調査研究委員会会長)
山崎真治(沖縄県立博物館・美術館)
仲里健(同上)
大堀皓平(沖縄県立埋蔵文化財センター)
宮城淳一(同上)
宮城弘樹(名護市教育委員会)
菅原広史(浦添市教育委員会)
4. 本書掲載の現場における遺構実測図、現場の撮影については與那嶺俊、仲村善洋、仲宗根理沙、喜納政英、玉城絵梨香が行った。
5. 調査の記録及び出土遺物の保管は、今帰仁村教育委員会で行う。
7. 本書の作成・執筆・編集は與那嶺・仲宗根・仲村が行った。
8. 遺物の実測はスケールを 1/3・1/4で統一した。遺構及び土層図は現場での実測を 1/20で統一したが、本書では 1/50・1/100に縮小統一している。

目 次

序 文	1
例 言	2
目 次	3
第 I 章 古宇利原 B遺跡の概要	
1 古宇利原 B遺跡の位置と環境	5
第 II 章 調査の概要	
1 調査に至る経緯	7
2 調査経過	7
3 調査組織	8
4 調査地区	8
第 III 章 層序	
1 層序	10
第 IV 章 遺構および出土遺物	
1 先史時代の遺構	13
第 V 章 総括	29
図 版	32
抄 録	46

第 I 章 古宇利原 B 遺跡の概要

1 古宇利原 B 遺跡の位置と環境

古宇利島は、沖縄本島北部の本部半島北東方向(N-36°、E-128°)に位置する約3.1km²の円形の島で、行政区は今帰仁村に属する。平成17年2月に屋我地島と結ぶ古宇利大橋、平成22年12月には屋我地島と対岸の今帰仁村を結ぶワルミ大橋が開通した。古宇利島の頂上からは、北に伊是名島、伊平屋島、西に伊江島、南から東にかけて本部半島の連山及び国頭の山々、加えて塩屋湾が望め、眼下に屋我地島を見渡すことができる。

島は隆起珊瑚礁を基盤とし、概ね三段の海岸段丘面が認められる。海岸段丘は海食作用等によって海岸付近に形成された平坦面が、海水準の低下や陸の隆起により離水し、海岸沿いに平坦地として分布する地形である。同島中央部が古世紀石灰岩からなり上位面(標高100~75m)、次いで中位面(65~35m)、下位面(30~10m)に区分され、中位面の地質は古生代から中生代の石灰岩で、下位面の地質は更新世(琉球)石灰岩となり下位ほど新しい地質となる。いずれの縁も段丘崖となり自然植生を残しているため、航空写真からもこの平坦面と段丘崖の連続を確認することができる。島の最高所は約100mを測り、標高70m付近までは緩やかに傾斜しているが、それ以後は急斜面で海岸に至る。従って海岸から島の中央部に行くには坂が急でやや登山に似て厳しい。海岸地形は北東部から南側に小規模な砂丘が形成され、外周の約70%は3~5mの隆起した岩縁で囲まれている。土壌は石灰岩風化の赤土(マージ)で島全体が覆われ、その被覆は薄い。

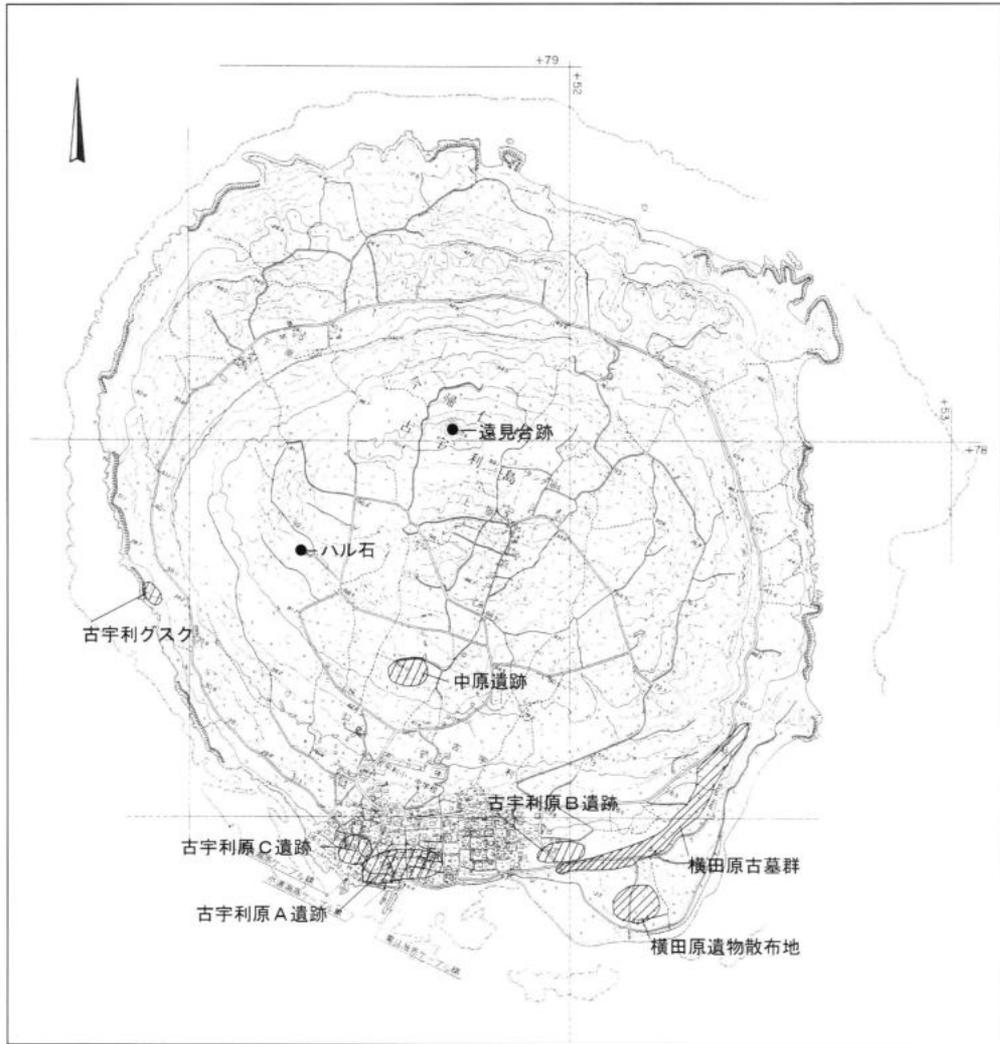
南側台地縁辺部には、今回調査した古宇利原A遺跡を含め古宇利原B遺跡、古宇利原C遺跡の3遺跡が知られている。いずれも標高10m前後の下位面(段丘)の遺跡である。また、海を渡れば、渡喜仁から上運天の台地縁辺部及び崖下に渡喜仁浜原遺跡を代表とする遺跡が集中し、他方屋我地島では大堂原貝塚など遺跡がある。加えて与那嶺の海岸一帯、伊是名島・具志川島などにも同時代の遺跡が集中しており、沖縄の先史時代を考える上でも重要な遺跡が多い地域の一つである。



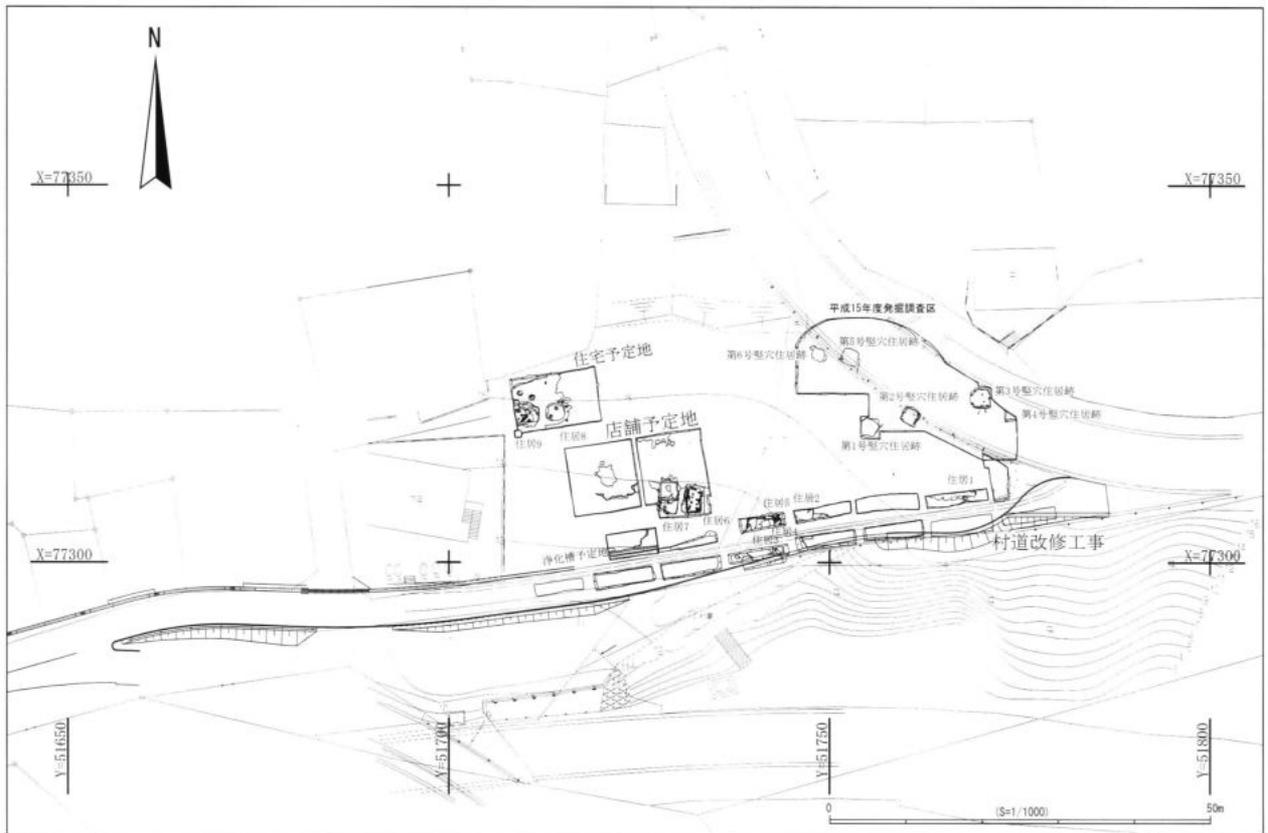
第1図 沖縄本島位置図



第2図 今帰仁村位置図



第3図 古宇利島の遺跡



第4図 遺構発掘調査区配置図 1000分1

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯

平成25年11月22日、個人住宅の建設と店舗の建設に伴う文化財の照会がなされた。さらに、平成25年11月27日には村建設課より村道古宇利線改良事業に伴う文化財の照会があった。これにより、同一遺跡内の隣接する地区において3つの事業による開発が計画されることとなった。平成25年11月、住宅の建設地と店舗の建設地において事前に試掘調査を行い、一部で遺物包含層が残ることを確認した。そこで、原因者側と現地保存についての協議をおこなったが、結果として記録保存を行うこととなった。住宅及び、店舗建設地においては平成25年度に調査を実施することで合意した。

店舗建設予定地については、原因者側から今帰仁村に調査を委託することで合意したため、平成26年1月7日付で古宇利原B遺跡発掘調査に関する協定書を締結し、つづいて平成26年1月21日付で古宇利原B遺跡緊急発掘調査業務委託契約書を締結のうえ、調査に着手している。なお、店舗建設予定地の発掘調査の一部を委託発注するために指名競争入札を実施し、落札した株式会社イーエーシーと平成26年1月27日に古宇利原B遺跡緊急発掘調査業務委託契約書を締結した。住宅建設予定地では村直営によって調査を行った。

村道古宇利線改良事業に伴い村建設課と遺跡の現地保存について協議を行ったが、結果として記録保存を行うこととなった。発掘調査を平成26年度に行うことで合意していたため、平成26年4月25日付で古宇利原B遺跡発掘調査に関する覚書を締結し調査に着手した。

2 調査経過

店舗建設に伴う発掘調査

店舗の建設の伴う発掘調査を平成26年1月27日より着手した。調査区は店舗建物の形状に合わせ設定した長軸18m、短軸9mの長方形となった。長軸の中央に幅50cmの土層堆積を確認するための畔を設け、畔の西側を店舗1とし、東側を店舗2とグリッド名を付した。当調査区も住宅予定地と同様、バックホーによって耕作土の剥ぎ取りを行った。店舗1においてはほぼ全面にわたって耕作土を除去すると、すぐに琉球石灰岩の岩盤が露頭した。店舗2では調査区の北壁側と南壁側の一部で岩の露頭がない部分あり、包含層が残存する可能性があったため手掘りに切り替えた。

村道改修工事に伴う発掘調査

平成26年4月25日、今帰仁村建設課と村道古宇利線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書を締結し、5月1日発掘調査に着手した。まず、道路のアスファルトを撤去し道路下の発掘調査を行っている。7月5日には道路部分の調査及び復旧工事を完了した。さらに、村道が拡幅される部分についての調査を行い、竪穴住居等の遺構を検出した。ただし、調査区が狭小であったため、遺構全体を確認することはできずに調査を終了することとなった。

3 調査組織

平成25年度の発掘調査及び出土資料整理調査関係者

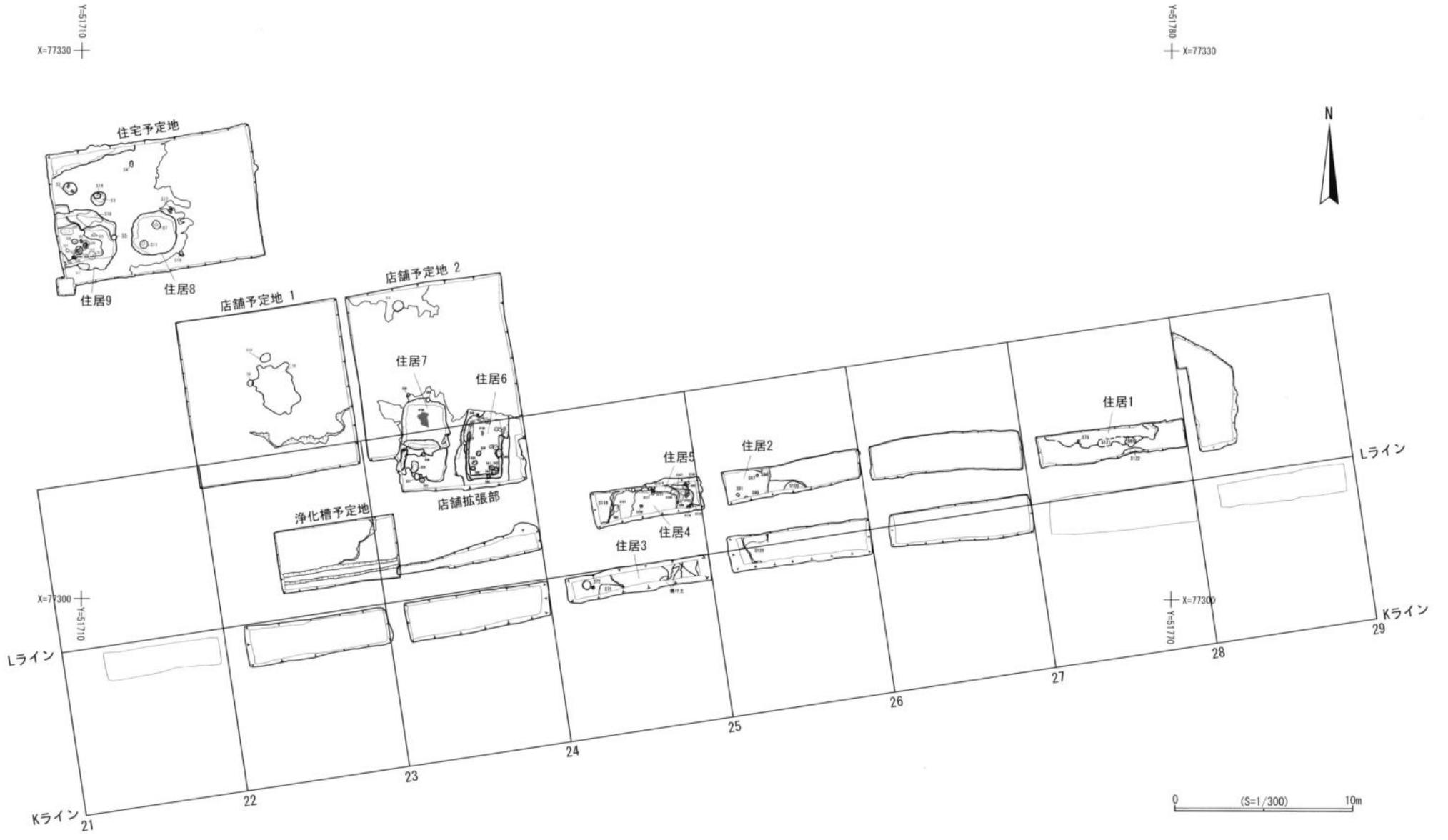
事業主体	今帰仁村教育委員会		
事業責任者	教育長	新城 敦	
	社会教育課長	上間恒章	
事務総括	文化財係長	宮里政有	
	文化財係主査	玉城 寿	
調査担当者	文化財係専門員	與那嶺俊	
調査補助員	臨時職員	仲村善洋	仲宗根理沙
資料整理	臨時職員	松本綾子	玉城静香 島袋滝子 山城留利子
発掘調査作業員(五十音順)		安村明日香	広瀬和美 小泊敦子 北東園子
		当真美涼	島盛太郎
業務委託	発掘調査支援業務	(株)イーエーシー	

平成26年度の発掘調査及び出土資料整理調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会		
事業責任者	教育長	新城 敦	
	社会教育課長	上間恒章	
事務総括	文化財係長	玉城 寿	
	文化財係主事	堀 真一	
調査担当者	文化財係専門員	與那嶺俊	
調査補助員	臨時職員	仲村善洋	仲宗根理沙
資料整理	臨時職員	松本綾子	玉城静香 島袋滝子 山城留利子
発掘調査作業員(五十音順)		松田洋子	又吉春美 広瀬和美 棚原利香子
		金良照江	天久 満

4 調査地区

調査を実施した地域は古宇利314番地内の店舗建設予定地である店舗地区と、314番地・315番地に面した村道古宇利線改修工事予定地である村道地区である。店舗の建設範囲は道路側の長軸で東側をS2(77308.773, Y=51734.466)、西側をS1(X=77306.035, Y=51716.473)を基線として9m×9mの東西2地区に分割しそれぞれ店舗1、店舗2の地区名を付けた。村道とおおむね平行に建設が予定されていた建物を基線として調査区を設定した。村道拡張部は店舗地区の長軸と平行に道路中央部に基線を引き、店舗東側のラインの延長線上に基準点L-24(X=77301.106, Y=51735.631)とし、9mおきに東に向かってL-25、L-26...とし、北に向かってM-24、とグリッド名を設定した。



第5図 発掘調査区遺構配置図

第三章 層序

本調査区は発掘調査直前まで芋を栽培していた畑地と村道であった所である。そのため、堆積層の深くまで攪乱を受けている状況であった。店舗予定地においては岩盤の落ち込んだ箇所遺構が形成されていたため、その影響を受けていない。村道下においても岩盤の落ち込み箇所で見られた。また、村道グリッド25ラインと26ラインでは厚い包含層が確認されている。なお、店舗予定地と村道下では基本層序が異なっているため、記述はそれぞれ行う。以下、基本層序について記述する。

1 店舗予定地 基本層序

I層(10YR暗褐色3/4) 貝やサンゴ、石灰岩等の少礫を多く含む耕作土。耕作行為により攪乱され、土器片や石器と共に陶磁器片やガラス片などの現代遺物が出土する。

II層(7.5YR暗褐色3/3) 石灰粒、赤色粒、炭化粒を含む、粘性のある締まった土。縄文時代の遺物を包含する遺物包含層である。店舗予定地2のみで確認された。

III層(7.5YR暗褐色3/4) 石灰粒が僅かに含まれる粘性の強い地山漸移層。

2 村道拡張 基本層序

I層(10YR暗褐色3/4) 石灰岩等の少礫を多く含む耕作土及び攪乱層。土器片や貝類と共に金属片や陶磁器片等の現代遺物が混在する。

II層(7.5YR暗褐色3/3) 砂や石灰岩等の少礫を含む粘性の弱い締まった土。縄文時代の遺物を包含する遺物包含層である。K-25、L-24、L-25、L-27グリッドで確認された。

IIIa層(10YR暗褐色3/3) 石灰岩等の少礫を僅かに含み、獣・魚骨が多く散在する土。縄文時代の遺物包含層である。L-25グリッドのみで確認された。

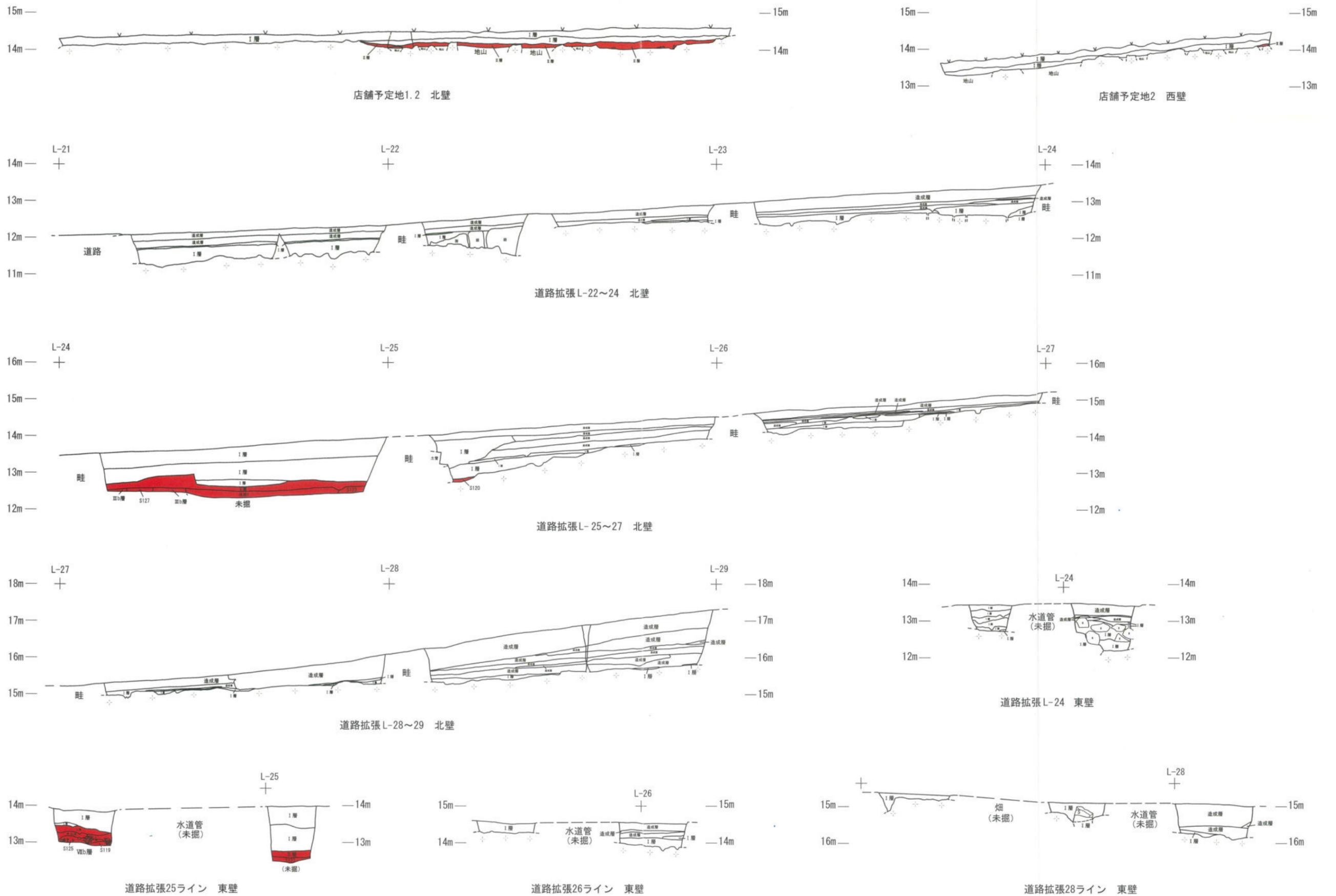
IIIb層(7.5YR褐色4/6と10YR暗褐色3/4) 炭化粒が僅かに見られ、粘性の強い締まった土。縄文時代の遺物を包含する遺物包含層である。K-25グリッドのみで確認された。

IVa層(10YR暗褐色3/3) IIIa層よりも粘性が強い。焼け土や炭の粒が少量含む土。縄文時代の遺物包含層である。L-25グリッドのみで確認された。

V層(10YR暗褐色3/4) 砂を多く含み、石灰岩や砂岩の少礫が見られる土。縄文時代の遺物包含層である。L-25グリッドのみで確認された。

VI層(10YR褐色4/6) 粘性の強い締まった土。縄文時代の遺物を僅かに含む、地山漸移層である。L-25グリッドのみで確認された。

VIIa層(7.5YR暗褐色3/3)、VIIb層(10YR褐色4/6) 粘性の強い、無遺物層。地山。



0 (S=1/100) 5m

第6図 発掘調査区土層図

第IV章 遺構および出土遺物

1 先史時代の遺構

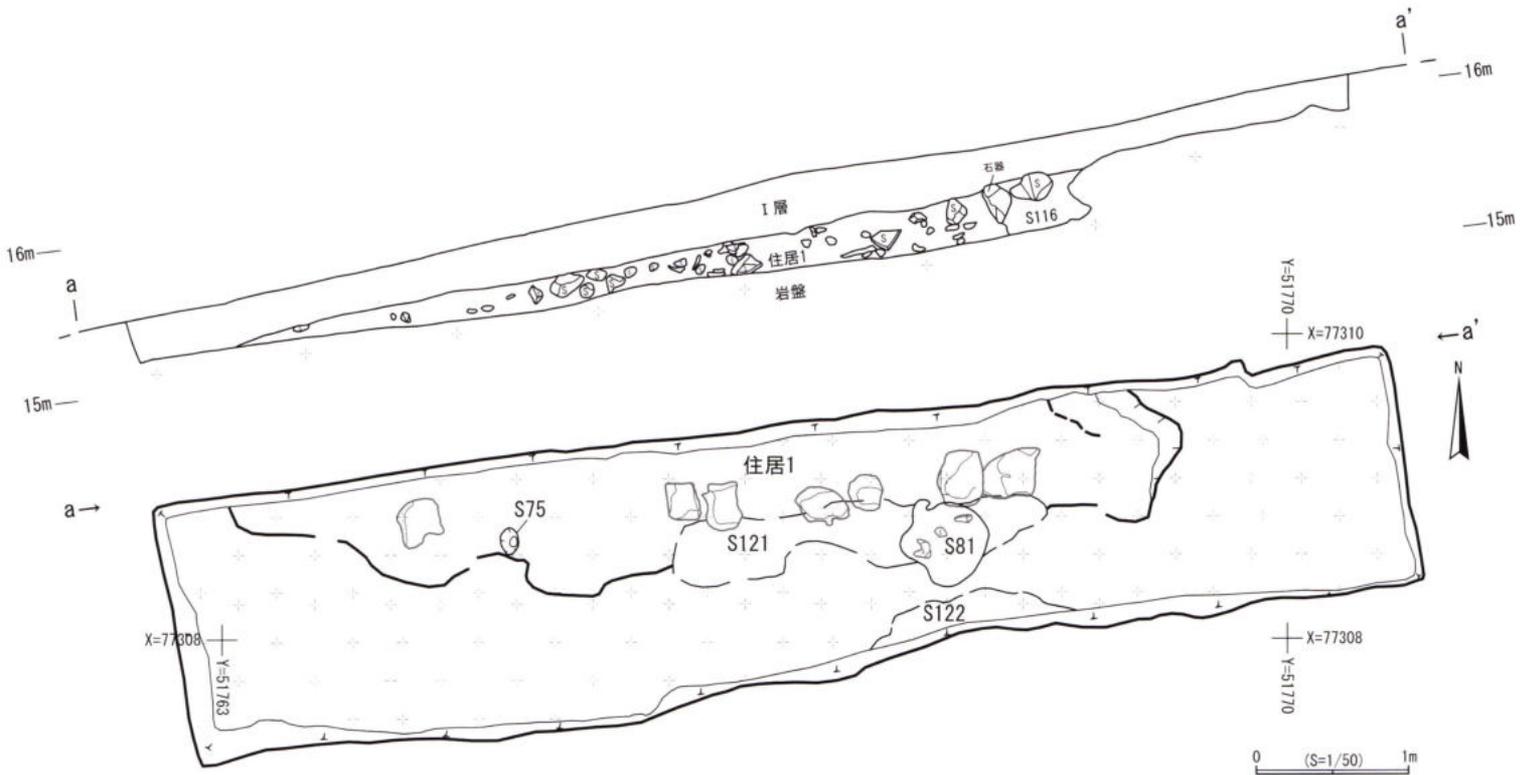
[名称] 住居1 (S115) [位置] L-28 [遺構図] 第7図 [検出面] I層

[遺構構成] 柱穴1基(S75) [規模] 長軸約514cm×深さ約32cm

[所見] L-28グリッドから検出された。一部は調査区外に延びており、正確なプランは把握できていなが、岩盤をフラットに整地しているため竪穴住居とした。住居の東側以外は岩盤の掘り込みが浅く、包含層も薄かったため住居の範囲も判然としない。検出部分の長軸は約514cm、深さ約32cmである。本住居では、北壁に並行するように20～50cm大の平たい石灰岩や砂岩が並んで検出された。この石列から北側には5～20cm大の礫が密集しており、壁石が崩落したものであると考えられるが、検出範囲が狭いため詳細はつかめていない。住居に関連する柱穴が1基(S75)確認されたが、他に繋がりそうな柱穴は見られなかった。火を受けた痕や炭層なども確認されていない。本住居はS121と切り合っていると考えられるが、明確な先後関係が確認できなかった。出土遺物としては、土器、石器が得られている。食物残滓としては貝、獣・魚骨が出土している。土器に関してはI群土器が優勢で出土しており、調査区内の住居の中でも古い住居と考えられる。

[遺構内堆積層]

10YR暗褐色3/3。石灰岩や砂岩などの礫が入る。砂を少量含み、粘性のある締った土。



第7図 住居1完掘状況

[名称] 住居2(S95) [位置] L-26 [遺構図] 第8図 [検出面] I層

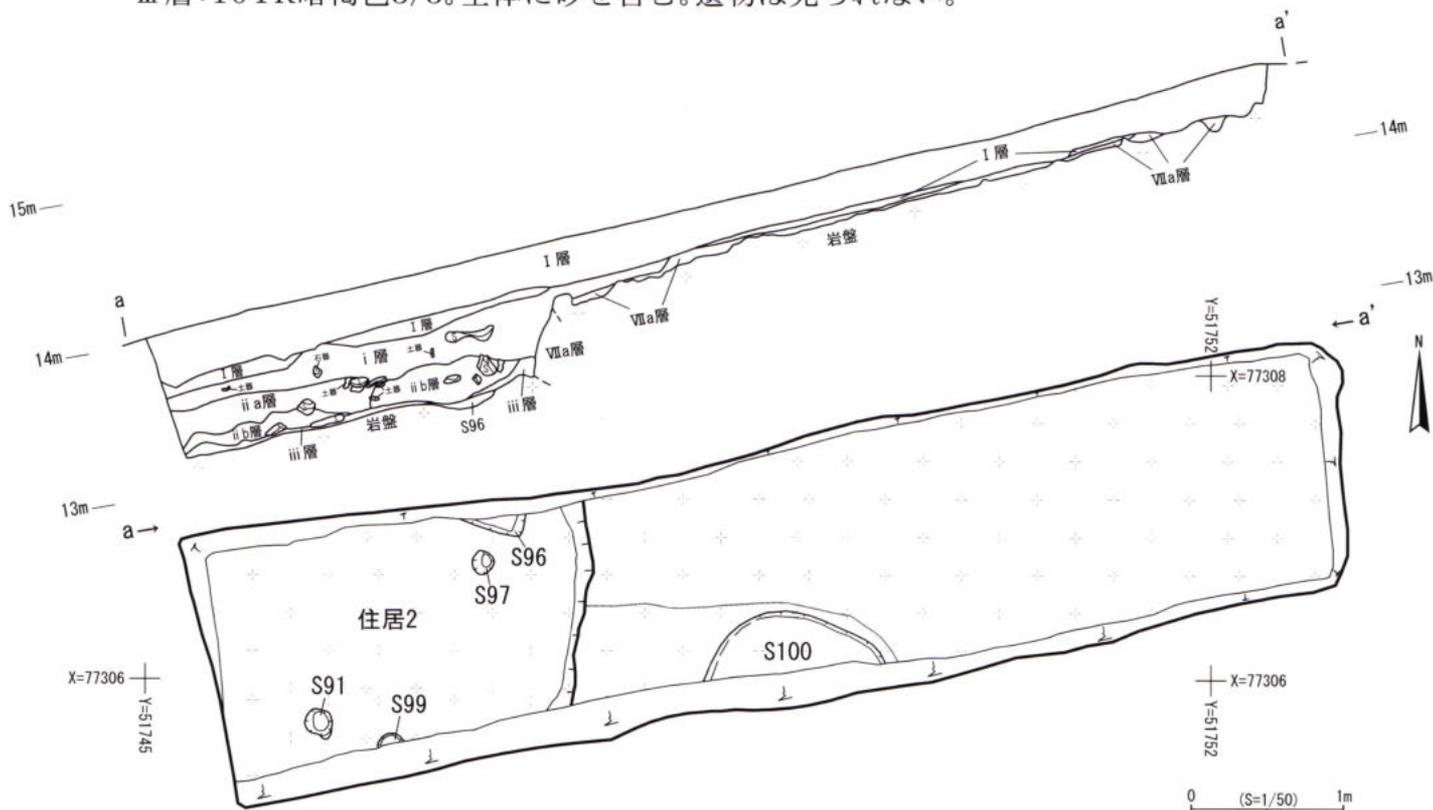
[遺構構成] 柱穴3基(S91・S97・S99) 溝状遺構1基(S96)

[規模] 長軸約238cm×深さ約56cm

[所見] L-26グリッドから検出された竪穴住居である。住居の一部のみ検出され、プランや規格は明確でない。住居の東側では、岩盤を約60cm掘り込んでいるのが確認できる。床面はフラットに整地されているが、西側では自然の落ち込みが見られる部分もある。火を受けた跡や炭層などは見られなかった。本住居内からは拳大以上の石灰岩や砂岩などの礫が多く出土しており、特にii層で多く礫が見られた。本住居では3基の柱穴が確認されている。掘肩は16～17cm、深さは9～21cmを測る。いずれも岩盤を掘り込んだ柱穴であるが、プランは定かでない。また、北壁際からは、長軸約47cm、深さ約6cmの掘り込みが検出された。溝状遺構の一部であると考えられるが、調査区外に続くため詳細は不明である。出土遺物としては、土器、石器、貝製品、骨・牙製品が得られている。土器のほとんどはII群に属するものである。食物残滓は貝類、獣骨、魚骨が出土している。土器や石器などの人工遺物も多く出土しているが、自然遺物の出土も目立つ。これらが大量の礫と共に密集して広がっていることから、住居としての機能を失った後に廃棄されたものであると考えられる。

[遺構内堆積層]

- i層: 全体的に7.5YR暗褐色3/4であるが、一部7.5YR極暗褐色2/3が混ざる。石灰岩や、砂岩、千枚岩の少礫を含み、炭の粒も僅かに出土。
- ii a層: 10YR黒褐色2/3。～1cm大の砂岩や石灰岩少礫を含む。炭や焼け土の粒も少量見られ、獣・魚骨も散在。
- ii b層: 7.5YR黒褐色3/2。全体に砂を含み、マイマイが多量に出土。石灰岩や砂岩などの～20cm大の礫も多く含む。炭や焼け土の粒も見られる。
- iii層: 10YR暗褐色3/3。全体に砂を含む。遺物は見られない。



第8図 住居2完掘状況

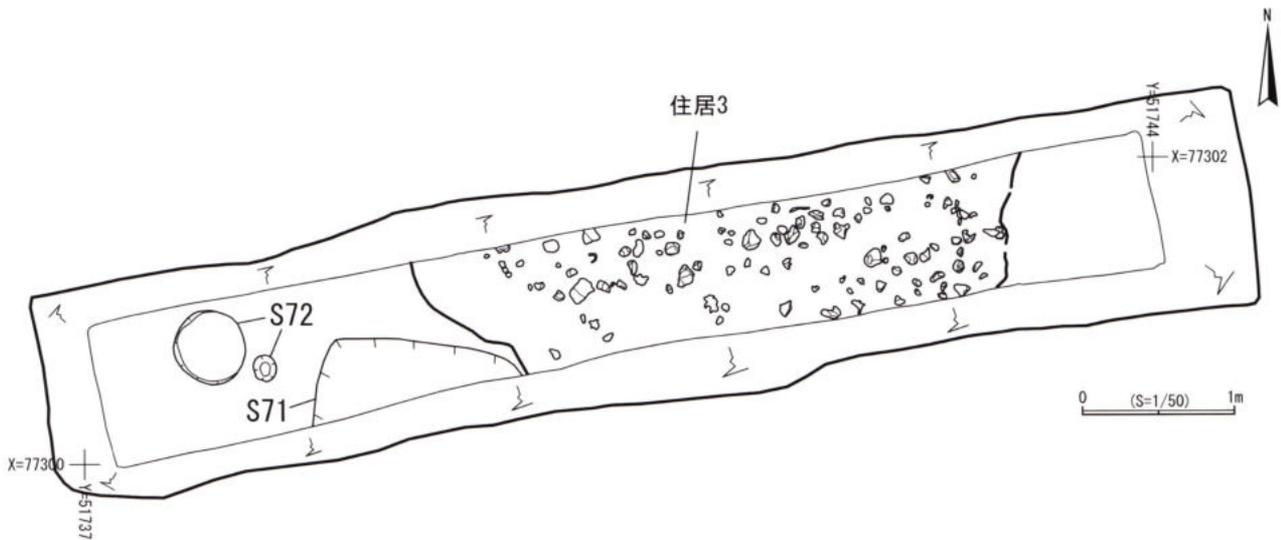
[名称] 住居3(S124) [位置] K-25 [遺構図] 第9図・第10図 [検出面] IIIb層
[遺構構成] 屋外炉(S71)

[規模] 長軸約416cm×深さ約18cm

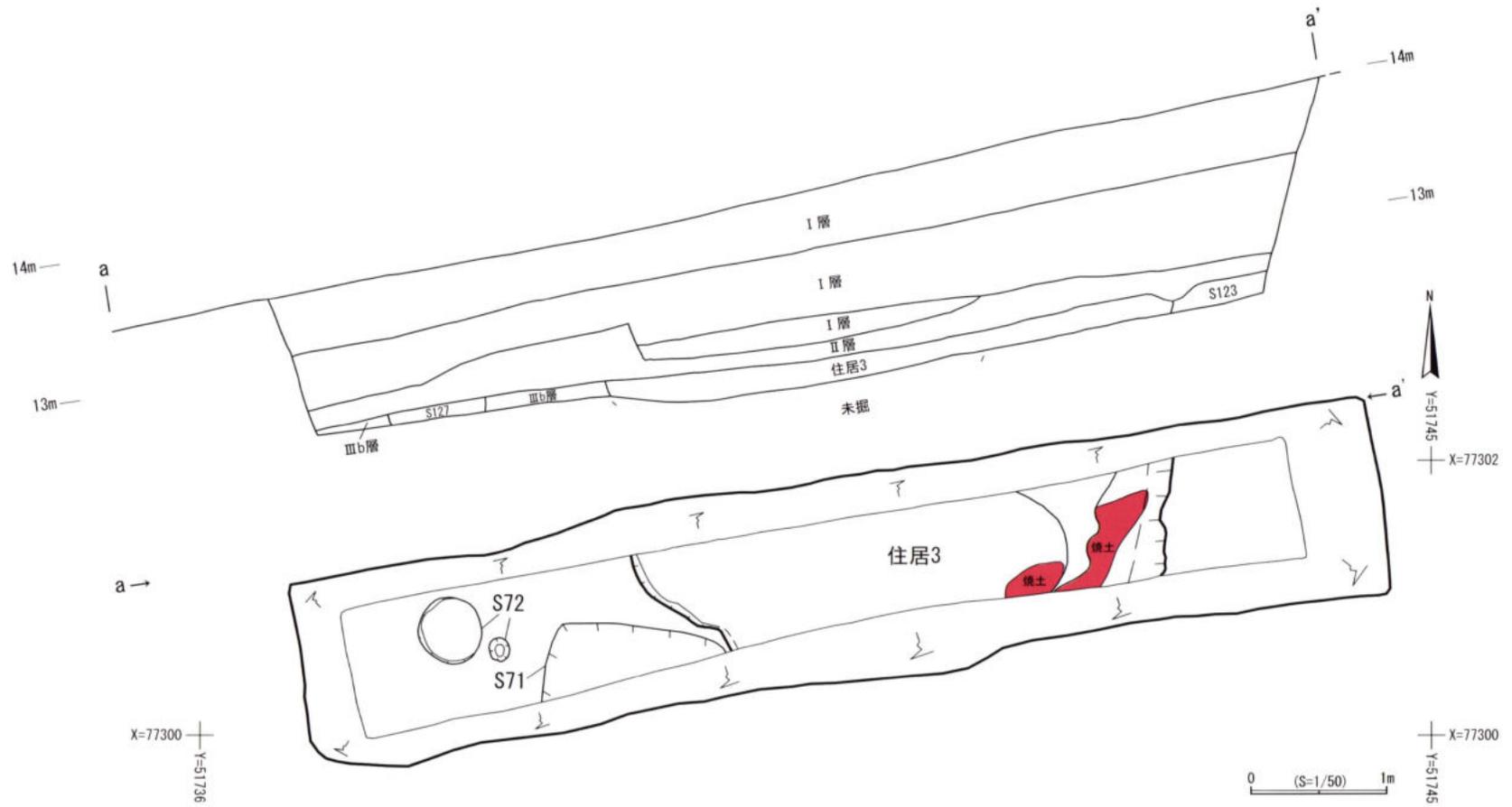
[所見] K-25グリッドから検出された。長軸約416cm、深さ約18cmの竪穴住居と考えられる。床面をフラットに整地しているため、竪穴住居としているが、遺構は調査区外に広がっており、プランは明確でない。本住居内には拳大以上の石灰岩や砂岩などの礫が密集して広がっており、礫と共に貝、土器、石器、獣・魚骨が散在していた。特に貝に関しては多量に出土している。自然遺物の出土が目立ち、貝塚の様な印象を受ける。自然礫と共に人工遺物が混在していることから、住居廃絶後に捨てられたことが想定される。住居に関する遺構としては、本住居の西側において、本調査で唯一屋外炉(S71)が検出されている。遺構が調査区外に広がっているため、全形や底面は確認できていないが長軸約140cm、深さ約32cmを測る。焼け土や炭化物、貝、獣・魚骨、土器が出土しているが、炭層は見られなかった。本住居とS71から出土する土器に関しては、荻堂式が中心に出土しており、水道管から北側の住居よりも若干古い住居であることがうかがえる。K-25に関しては工期の関係により、住居3及びIIIb層より下層は未掘である。本住居の直下には遺構が見られたため、荻堂式の時期よりも古い住居の存在が考えられる。今後の調査によって詳細が明らかになることが期待される。

[遺構内堆積層]

10YR暗褐色3/4。石灰岩や砂岩、千枚岩などの礫と貝を多量に含む。



第9図 住居3検出状況



第10図 住居3完掘状況

[名称] 住居4(S103) [位置] L-25 [遺構図] 第11図・第12図 [検出面] VII層、岩盤

[遺構構成] 柱穴3基(S109・S111・S117)

[規模] 長軸約368cm×深さ約50cm

[所見] L-25グリッドから検出された。調査区外に延びる遺構であるが、隅丸長方形と想定される。長軸は約370cm、深さ約15cmである。住居4は遺構の縁辺部が北壁に沿うように検出された。北壁には10～50cm大の石灰岩や砂岩が並んで入り込んでおり、これは本住居の壁石であったと考えられる。また本住居は全体的に礫が散在しており、これは壁石が崩れたものであると想定される。礫の中には石灰岩、砂岩、チャートなどが見られた。石灰岩以外は古宇利島で産出しない石材であり、これらは石器や壁石に使用されるために持ち込まれたものであると考えられる。また、多量の礫に混ざって土器や石器、獣・魚骨、貝が散在しており、本住居は壁石が崩れた後、住居としての機能を失い廃絶したと考えられる。床面は東西で岩盤と地山に分かれており、どちらもフラットに整地されている。竪穴に関連する柱穴が3基確認できているが、プランは明確でない。炉跡や炭層は確認できていない。出土遺物としては、土器、石器、骨製品、貝製品が出土している。食物残滓として貝、獣・魚骨が得られた。土器に関してはⅡ群が大半を占めている。なお、本住居は住居5を掘り込んで形成された竪穴住居であるが、検出の段階で切り合いが確認できず、住居5の出土遺物に本住居の遺物も混在している。

[遺構内堆積層]

10YR暗褐色3/4に10YR褐色4/6が少し混ざる。全体に砂が入っており、炭や焼け土の粒も僅かに見られる。10～30cm大の石灰岩や砂岩などの礫が全体的に広がっている。マイマイや貝類も多く出土し、特に1cm大の二枚貝が多量に見られる。



第11図 住居4検出状況

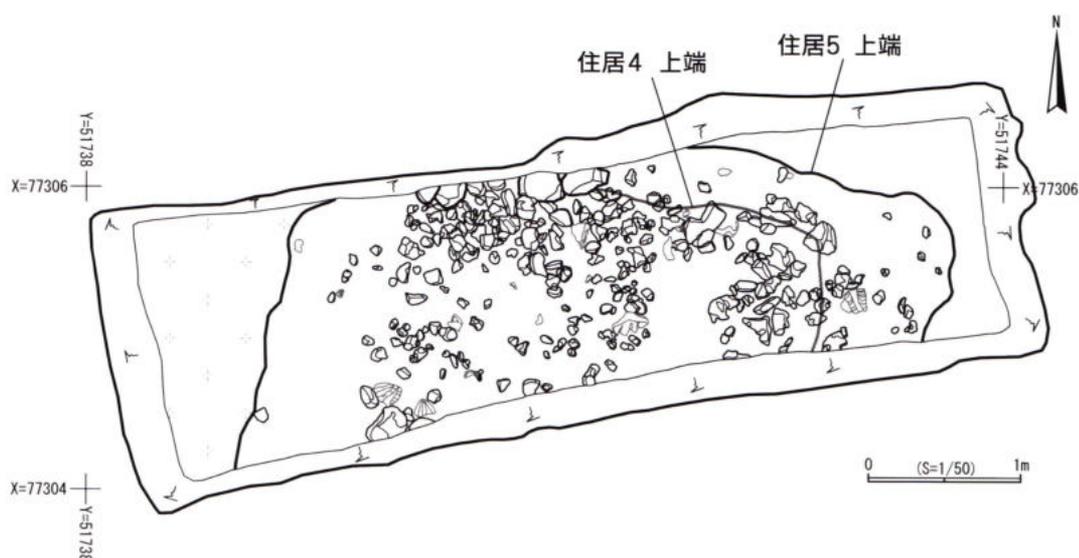
[名称] 住居5(S94) [位置] L-25 [遺構図] 第12図・第13図 [検出面] VIIb層
[遺構構成] 柱穴2基(S102・S112) 炉跡1基(S104)

[規模] 長軸約235cm×短軸約105cm×深さ約17cm

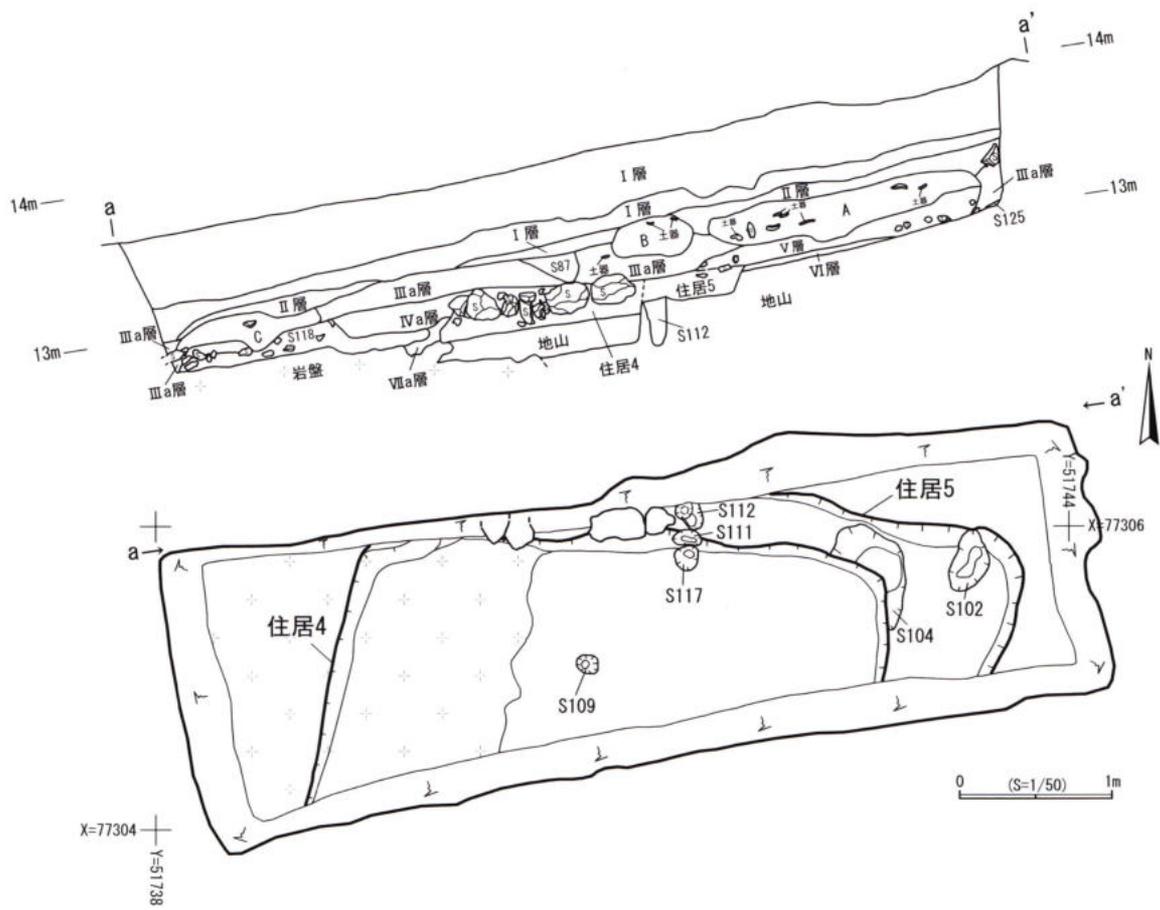
[所見] L-25グリッドから検出された。住居4に切られており、遺構の一部のみの残存となっている。地山を掘り込んだ竪穴住居と考えられるが、遺構範囲が狭小であるためプランは不明である。検出当初は住居4との重複が確認できず、住居4の範囲も本住居に含めていたため、純粋な住居5の遺物はほとんど分けられていない。住居内からは炉跡が1基(S104)検出された。長軸約62cm、深さ約26cmを測る不定形の屋内炉である。S104も住居4に切られているため、詳細は不明であるが炉を囲む礫などは検出されていない。土は赤褐色を呈し、固く締まっている。また、炭層や炭化物などの遺物は見られなかった。住居に関連する柱穴が2基検出されている。住居縁辺部にあるS102は長軸約42cm、深さ約10cmを測り、内部からは拳大の礫が出土している。これは根固め石と考えられる。S112も縁辺部であるが、プランは判然としない。出土遺物としては土器が得られ、貝類や獣・魚骨の食物残滓も出土している。土器に関してはほとんどがII群に属し、I群が少量散見される程度である。しかし、住居4の遺物も混在していることから正確性に欠ける。

[遺構内堆積層]

10YR暗褐色3/4。全体に砂を含み、～10cm大の石灰岩や砂岩の少礫が多く入っている。マイマイや獣・魚骨も散在。



第12図 住居5検出状況



第13図 住居4、住居5完掘状況

2. 店舗予定地

[名称] 住居6(S20) [遺構図] 第14図・第15図 [位置] 店舗予定地2、店舗拡張部

[検出面] II層

[遺構構成] 柱穴9基(S38・S39・S40・S41・S42・S43・S44・S45・S46)

溝状遺構1基 炉跡1基 壁石

[規模] 長軸約357cm×短軸約245cm×深さ約30cm

[所見] 店舗予定地2から店舗予定地拡張部分にまたがって検出された。保存状態の良い、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。岩盤を掘り込んだ住居で、北側では約20cmの深さを測るが、南側は明瞭でない。床面はフラットに削られている。住居北側の床面には約31cm×16cmの範囲で赤く変色しているのが確認でき、屋内で火を使用していたことがうかがえる。また、本住居内から得られている礫や石器の中には火を受けて赤変しているものがいくつか見られた。これは炉の周りを囲っていた礫であると考えられる。炉跡周辺から炭層は検出されていない。本住居では壁石が検出された。住居北側の内縁に約190cm×187cmの範囲で並んでおり、石が抜けて南側は判然としないが隅丸方形が想定される。石材には10～80cmの石灰岩や砂岩などが見られた。また、本住居では西、南、東側縁辺部にかけて幅約22cm、深さ約15cmを測るコの字状の溝が検出された。住居内部への水の進入を防ぐ施設であると考えられる。この溝内からは石器や土器、貝などが出土している。住居6は壁石を有した住居と溝状遺構を有した住居が重複していると考えられる。溝状遺構は壁石のラインと一部重なるようにその下部から検出された。また、溝状遺構の東側に位置するS45においては、柱穴を塞ぐように上面から石皿が出土している。このことから溝状遺構を有する住居が廃絶した後、壁石を有する住居が形成されたと考えられる。住居6の南側では柱穴が集中して検出されている。掘方の径は25～31cmで、深さは18～27cmを測る。溝状遺構からも柱穴が2基確認されており、これも含め溝を有する住居は6本柱の竪穴住居であったと考えられる。柱穴の中でも、S38、S43では柱穴内に貝や拳大以上の石灰岩が含まれていた。住居5の柱穴(S102)同様、根固めのものと考えられる。出土遺物としては、土器、石器が得られている。出土土器の大半をII群土器が占め、I群、III群と続く。III群の存在から村道下のグリッドよりも新しい竪穴住居であると想定される。食物残滓は獣骨、魚骨、貝などが見られた。また、本住居からも礫が多く出土しており、これらも壁石や石器に使用するためのものであると考えられる。なお、本住居は別の竪穴住居と重複していると考えられるが、明確な切り合いは確認できていないため、1棟の竪穴住居として扱っている。

[遺構内堆積層]

i 層:10YR暗褐色3/3。少礫は殆ど見られない。炭や焼け土を少量含む。

ii 層:10YR暗褐色3/3に赤色の少礫が多く入っている。炭や焼け土も少量見られる。

iii a層・II b層:10YR黒褐色2/3。炭と焼け土を含み砂岩や千枚岩の少礫も混ざっている。

多量の土器が出土する。分層上、二つの表記となっているが同一層である。

iii b層:10YR暗褐色3/3。炭と焼け土が見られ、少礫も含んでいる。iii a層と同時期と考えられるが、直下に石灰岩があるため、変色していると考えられる。

iii c層:10YR黒褐色2/3。全体に砂を含み、焼け土が僅かに見られる。溝状遺構下部において確認された。

[名称] 住居7(S21) [位置] 店舗予定地、店舗拡張部

[遺構図] 第14図・第16図・第17図 [検出面] II層

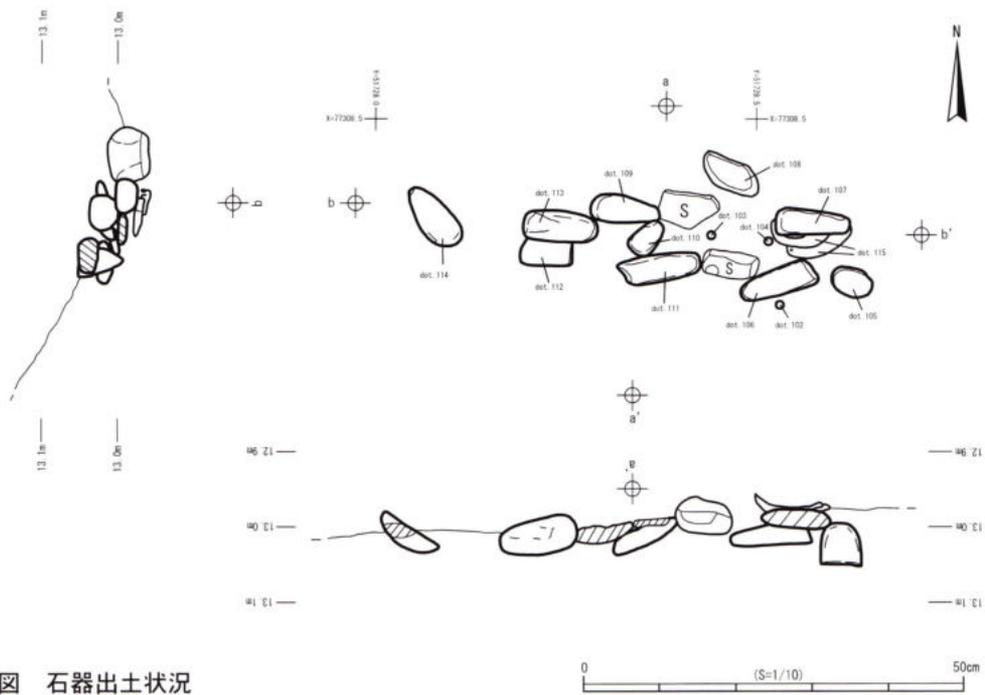
[遺構構成] 柱穴2基(S36・S56) ピット2基(S31・S32) 土坑1基(S34) 石器集積1基
溝状遺構2基 炉跡1基

[規模] 長軸約415cm×短軸約247cm

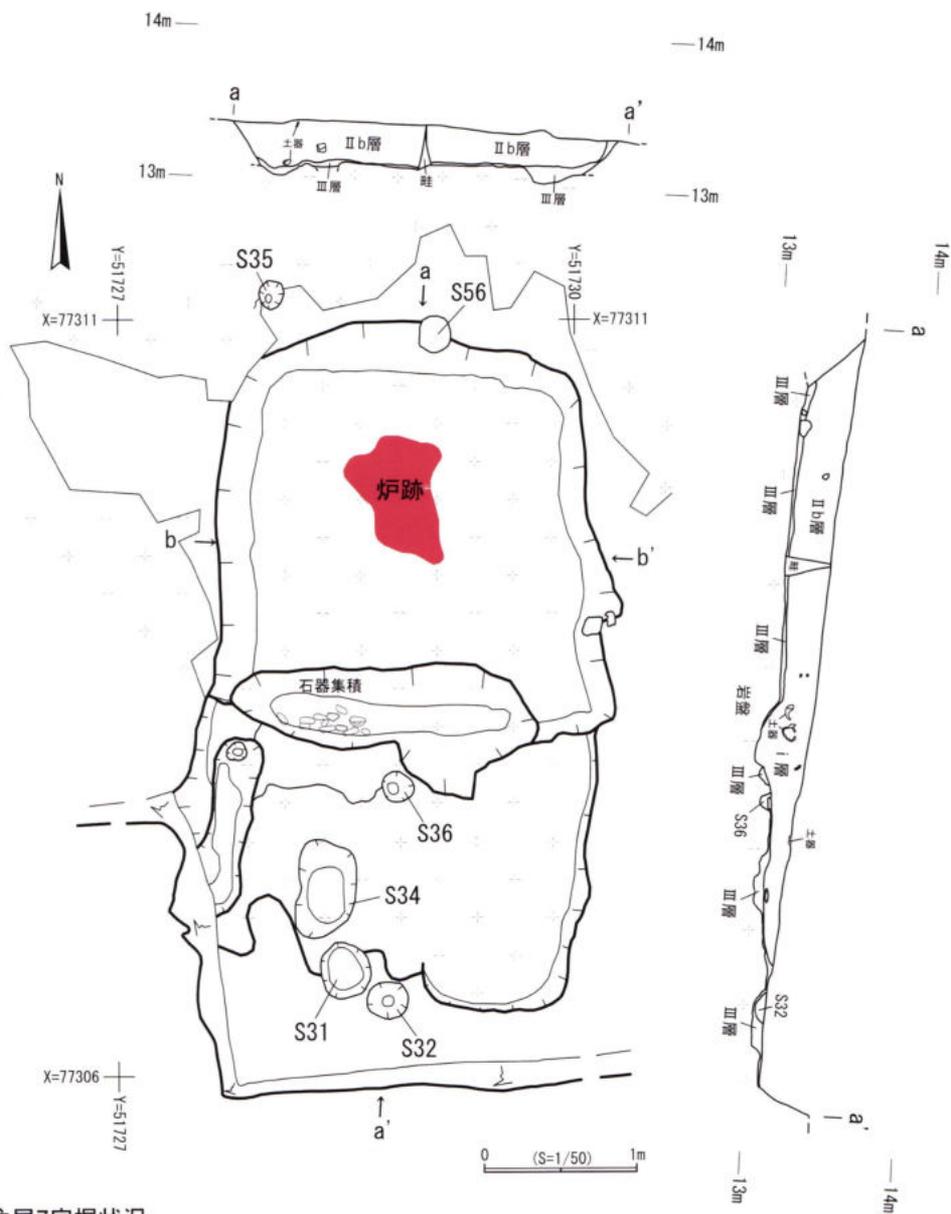
[所見] 店舗予定地から店舗予定地拡張部分にまたがって検出された。住居6同様、保存状態の良い隅丸長方形の竪穴住居である。住居北側では岩盤を約40cm掘り込んでいるが、南側の掘り込みは浅く、不明瞭である。床面はフラットに削られている。住居北側の床面では屋内炉と考えられる、約76cm×41cmの範囲で岩盤が赤変している部分が見られた。本住居においても炭層は検出されていない。住居中央部では東西に走る溝状遺構が確認された。住居6の溝状遺構とは性格が異なるものであり、遺構内からは石斧集積(dot.102～114)とイノシシの牙製腕輪一對(dot.115)が共伴して出土している。住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。住居の南側中央部では土坑(S34)が見られた。約74cm×42cm、深さ約20cmを測る。住居床面からさらに岩盤を掘り込んでいる遺構で、中央には球形の石器が1点あり、それを囲むように自然石及び石器が確認された。性格や機能は不明である。住居の縁辺部及び内部から柱穴が確認されているが、プランは組めていない。本住居では住居6の様な岩盤を丁寧に掘り込んだ柱穴は見られず、柱穴の数自体も少ない。本住居の南西端には岩盤を掘り込んだ溝状遺構が見られる。住居6において見られる溝状遺構と似た様相をしているが、溝の加工がやや雑である。溝は調査区外に延びているため詳細は明らかではないが、本住居の施設ではなく他の遺構に関係するものと考えられる。住居7の出土遺物としては、土器や石器、貝類、獣・魚骨が出土しており、特に石斧集積と腕輪は注目するに値する。出土土器の殆どがII群に属し、I群、III群と出土の割合が減る傾向にある。また、本住居は本調査区の中でも最も土器と石器の出土量が多く、石斧と敲石の出土量が住居7に偏りが見られた。なお、本住居は石斧集積が出土した溝状遺構を境に2～3棟の竪穴住居が重複していると考えられるが、明確に分けられなかったため、一棟の住居として扱っている。

[遺構内堆積層]

i層・IIb層:10YR黒褐色2/3。炭と焼け土を含み、砂岩などの少礫も見られる。多量の土器が出土する。分層上、表記は二つあるが同一層である。



第16图 石器出土状况



第17图 住居7完掘状况

2 住居7出土遺物について

住居7で出土した遺物を第18図から第20図に掲載した。以下に各遺物を詳述する。

(1) 石器(第18図1~13、第1表)これらはすべて住居内の溝状遺構から検出されたものである。18-1は両刃磨製石斧で撥型を呈する。刃部の一部を破損する。基部には着柄痕がみられ(スクリーントーン部)、裏面の割れ面は着柄に伴う使用痕とみられる。18-2は短冊形を呈する両刃磨製石斧で刃部の一部が欠損する。これも着柄痕がみられる(スクリーントーン部)。18-3は砥石とみられ、両面で使用していたとみられる。18-4は両刃磨製石斧の基部の上部が欠損した刃部のみの資料で、刃部に斜めに走る線条痕が観察でき縦斧とみられる。18-5は刃部を欠損するが磨製石斧で撥型を呈する。18-6は小ぶりの両刃磨製石斧で撥型を呈する。18-7は敲石で楕円形を呈する。長軸の両端部で敲打痕がみられる。18-8は扁平な小型の磨製石斧で表面は丁寧に研磨される、裏面も全体的に研磨しているが自然面も残る。刃部には刃こぼれがみられる。18-9は小型の両刃磨製石斧で基端部を一部欠損するもののほぼ完形の資料である。撥型を呈し、全体的に研磨される。18-10は磨製石斧で刃部を欠損する。全体的に研磨され、裏面には着柄による剥落がみられる。形態は細長いヘラ状を呈する。18-11は扁平な両刃磨製石斧。長軸6.6cmと小型だが完形品である。刃部には斜めに走る線条痕がわずかに認められることから縦斧とみられる。18-12は磨製石斧を敲石に転用したもので、基端部と欠損した刃部に敲打痕を有する。18-13は半割された円礫を利用した両刃磨製石斧で、割れ面も研磨がなされる。刃部はもともと丸刃状になっているが、破損した刃部の左半分を研ぎなおし再利用しているため、この部分がやや直線的になっている。

(2) 土器(第19図1~7、第20図1~7、第2表)本報告では西長浜原遺跡(沖縄県立埋蔵文化財センター2006年)の土器分類を参考に、以下のⅠ~Ⅲ群に大別した。Ⅰ群は伊波式・荻堂式・大山式、Ⅱ群はカヤウチバンタ式・室川式・宇座浜式などのいわゆる肥厚口縁を有するもの、Ⅲ群は犬田布式・喜念Ⅰ式などの奄美系土器である。19-1はⅡ群に属する壺型土器で、頸部はくびれ胴部で最大径を測る。無文の肥厚口縁で断面は丸みを帯びる。19-2は無文の肥厚口縁で、Ⅱ群に属する。直線的に立ち上がり、口縁上部で若干外反する。口縁部の断面は三角形状を呈している。19-3は口縁が三角形を呈する肥厚口縁で、Ⅱ群に含まれる。頸部には沈線文が並列して施文されている。19-4は口縁部に最大径を持つ無文土器で、Ⅱ群に属する。肥厚は微弱で、口縁上部は若干外反する。19-5はⅡ群に含まれる有文の肥厚口縁である。口唇部に刺突文を施している。頸部には叉状工具による押捺文が見られ、口唇と押捺文の間は沈線文を鋸歯状に施文している。また、胴部には頸部よりも先の細い叉状工具により縦位の押捺文が施されている。19-6はⅡ群に属する無文の肥厚口縁である。肥厚は水平に成形され、下端は緩やかになっている。口縁は直線的で、胴は張らない。19-7は三角形の肥厚を持つ有文口縁で、Ⅱ群に含まれる。口唇と口唇直下に刺突文が見られ、口唇直下においては叉状工具で施文されている。20-1はⅠ群に属し、山形口縁であると推測される。叉状工具による押引文が並列し、その下には鋸歯状文が施文されている。20-2は有文の肥厚口縁で、Ⅱ群に含まれる。肩部には断面が長方形の凸帯があり、口縁部下位には段差を設け肩部と口縁の間に空間を作っている。その空間は沈線による鋸歯文が見られる。また、凸帯直下には半截状の工具により押捺文が施文されている。20-3はⅡ群に含まれる三角形に肥厚した口縁部である。頸部には押引文が横位に施文されているが、摩耗して不明瞭である。押引文と口唇の間は格子状の沈線文で埋められている。20-4はⅢ群に属し、口縁部が三角形状を呈する。口唇直下には不明瞭であるが、叉状工具による押引文が見られる。口縁部から頸部にかけて三角形の凸帯文が縦位と横位施文されており、凸帯にも叉状工具により押引文が施されている。口唇直下の押引文から胴部の間には沈線

による綾杉文が見られる。20-5はややくびれる平底である。内底は微弱な盛り上がりが見られる。20-6は内面に指頭痕が残る丸底である。20-7は微弱なくびれが見られる平底である。立ち上がりが左右で異なり、右側がより大きく開く。

(3)骨製品(第20図8、9、第3表)これらは住居内の溝状遺構から石斧集積と共に出土したものである。20-8はイノシシの下顎側犬歯を使用した腕輪である。臼歯側に2箇所V字状の抉りを施している。さらに象牙質側から穿孔を施した痕が見られるが、貫通した痕が見られないため加工途中で破損したと考えられる。切歯側においても先端に穿孔途中で破損した痕があり、その上部に新たに穿孔を行っている。20-9もイノシシの下顎側犬歯を素材とした腕輪であり、出土状況から20-8と対のものと想定される。臼歯側に2箇所、切歯側に1箇所V字状の抉りが見られる。切歯側においてはエナメル質側から抉りを入れ、象牙質側から回転穿孔を施している。

第1表 住居7出土石器

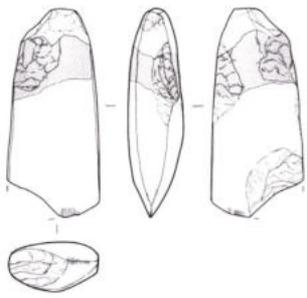
挿図番号 図版番号	種別	分類	器種	計測値(cm, g)				石材	出土地区 遺構No. 層位 備考	遺構
				長さ	幅	厚さ	重量			
第18図-1 図版12-1	石器	石斧	横斧	111.92	48.87	27.16	223.75	閃緑岩	店舗2 S21 II b層 dot. 102	住居7
第18図-2 図版12-2	石器	石斧	横斧	118.42	45.9	26.3	259.57	緑色片岩	店舗2 S21 II b層 dot. 103	住居7
第18図-3 図版12-3	石器	砥石	-	123.74	46.5	21.92	177.78	砂岩	店舗2 S21 II b層 dot. 104	住居7
第18図-4 図版12-4	石器	石斧	縦斧	66.65	61.39	35.31	201.1	閃緑岩	店舗2 S21 II b層 dot. 105	住居7
第18図-5 図版12-5	石器	石斧	不明	103	43.55	20.45	142.98	緑色片岩	店舗2 S21 II b層 dot. 106	住居7
第18図-6 図版12-6	石器	石斧	不明	91.04	39.98	25.48	130.86	細粒礫岩	店舗2 S21 II b層 dot. 107	住居7
第18図-7 図版12-7	石器	砥石	-	93.97	46.87	33.94	183.52	砂岩	店舗2 S21 II b層 dot. 108	住居7
第18図-8 図版12-8	石器	石斧	横斧か	97.02	49.56	15.75	123.01	輝緑岩	店舗2 S21 II b層 dot. 109	住居7
第18図-9 図版12-9	石器	石斧	不明	75.19	48.09	25.31	137.8	輝緑岩	店舗2 S21 II b層 dot. 110	住居7
第18図-10 図版12-10	石器	石斧	不明	123.14	45.9	26.57	247.88	緑色片岩	店舗2 S21 II b層 dot. 111	住居7
第18図-11 図版12-11	石器	石斧	縦斧	66.12	48.66	18.33	98.86	緑色片岩	店舗2 S21 II b層 dot. 112	住居7
第18図-12 図版12-12	石器	石斧	砥石転用	109.76	49.62	29.31	311.69	輝緑岩	店舗2 S21 II b層 dot. 113	住居7
第18図-13 図版12-13	石器	石斧	不明	104.62	52.46	17	147.16	緑色片岩	店舗2 S21 II b層 dot. 114	住居7

第2表 住居7出土土器

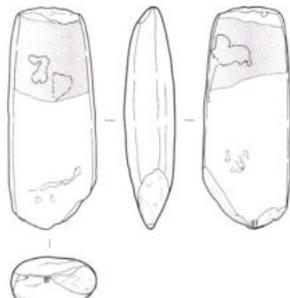
挿図番号 図版番号	種別	分類	部位	計測値(cm)		備考	出土地区 遺構No. 層位 備考	遺構
				口径	底径			
第19図-1 図版13-1	土器	II群	口縁部	9.9	-		店舗2 S21 II b層 dot. 65	住居7
第19図-2 図版13-2	土器	II群	口縁部	15.5	-		店舗拡張 S21 II b層 dot. 69	住居7
第19図-3 図版13-3	土器	II群	口縁部	13.5	-		店舗2 S21 II b層 dot. 93	住居7
第19図-4 図版13-4	土器	II群	口縁部	20.4	-		店舗2 S21 II b層 dot. 39	住居7
第19図-5 図版13-5	土器	II群	口縁部	15.6	-		店舗2 S21 II b層	住居7
第19図-6 図版13-6	土器	II群	口縁部	32.2	-		店舗2 S21 II b層 dot. 36	住居7
第19図-7 図版13-7	土器	II群	口縁部	17.6	-		店舗2 S21 II b層 dot. 66	住居7
第20図-1 図版14-1	土器	I群	口縁部	-	-		店舗2 S21 II b層	住居7
第20図-2 図版14-2	土器	II群	口縁部	11.4	-		店舗拡張 S21 II b層	住居7
第20図-3 図版14-3	土器	II群	口縁部	-	-		店舗2 S21 II b層	住居7
第20図-4 図版14-4	土器	III群	口縁部	12.9	-		店舗2 S21 II b層	住居7
第20図-5 図版14-5	土器	-	底部	-	-		店舗2 S21 II b層 dot. 98	住居7
第20図-6 図版14-6	土器	-	底部	-	-		店舗2 S21 II b層 dot. 85	住居7
第20図-7 図版14-7	土器	-	底部	-	2.8		店舗2 S21 II b層 dot. 68	住居7

第3表 住居7出土骨製品

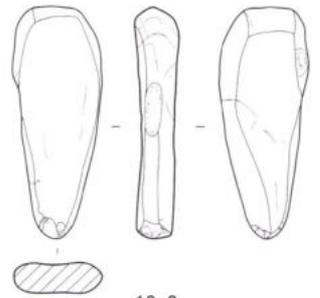
挿図番号 図版番号	種別	製品名	素材	法量(計測値) / cm, g				残存状況	出土地区 遺構No. 層位 備考	遺構
				最大長	最大幅	厚さ	重量			
第20図-8 図版14-8	骨製品	腕輪	イノシシ 右下顎 牙	86.16	16.16	8.78	12.79	破損	店舗2 S21 II b層 dot. 115	住居7
第20図-9 図版14-9	骨製品	腕輪	イノシシ 左下顎	85.9	15.95	9.15	15.02	完形	店舗2 S21 II b層 dot. 115	住居7



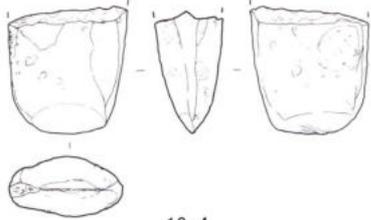
18-1



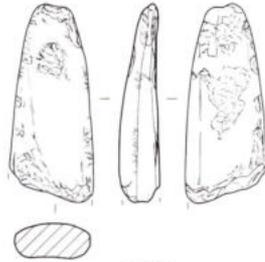
18-2



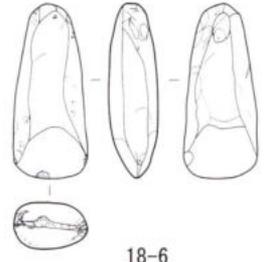
18-3



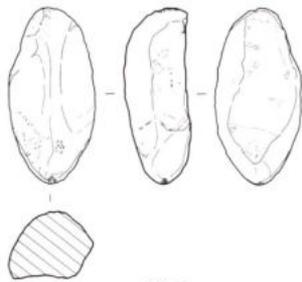
18-4



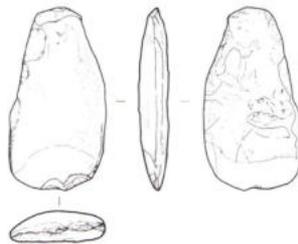
18-5



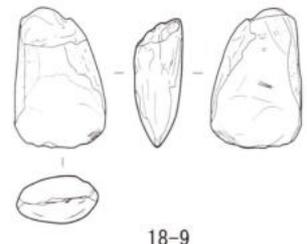
18-6



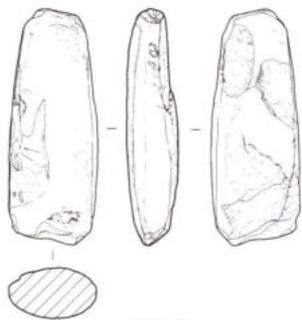
18-7



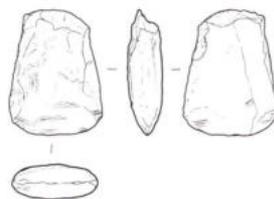
18-8



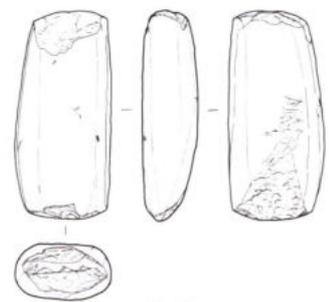
18-9



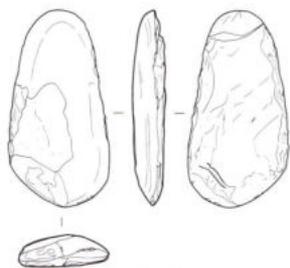
18-10



18-11



18-12



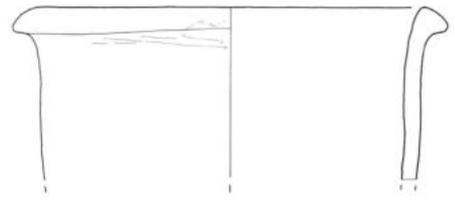
18-13



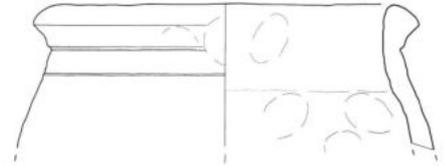
第18図 住居7出土遺物実測図①



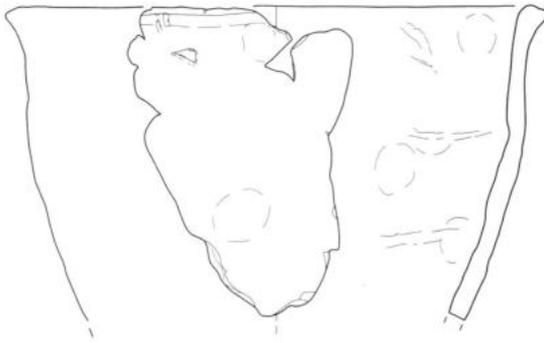
19-1



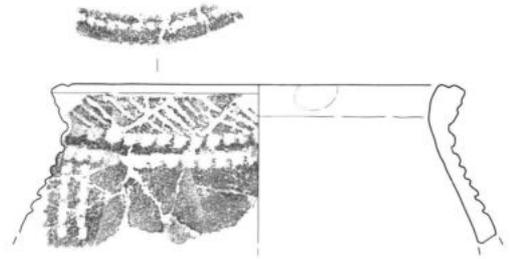
19-2



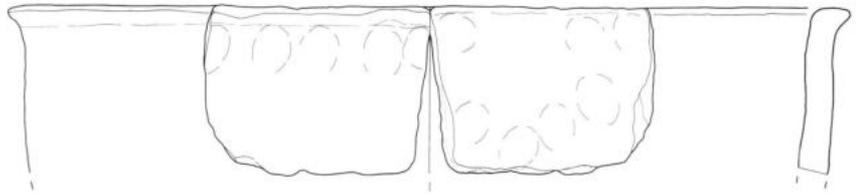
19-3



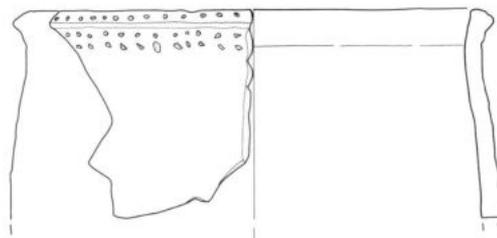
19-4



19-5



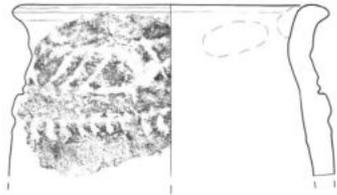
19-6



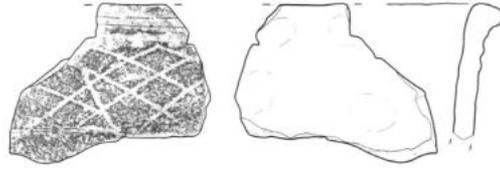
19-7



第19図 住居7出土遺物実測図②



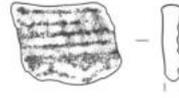
20-2



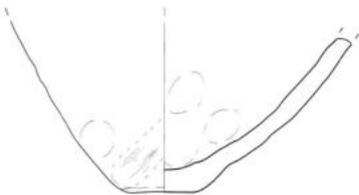
20-3



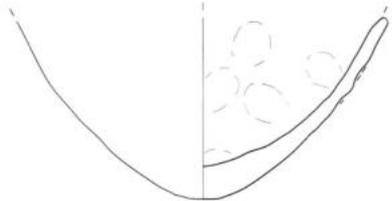
20-4



20-1



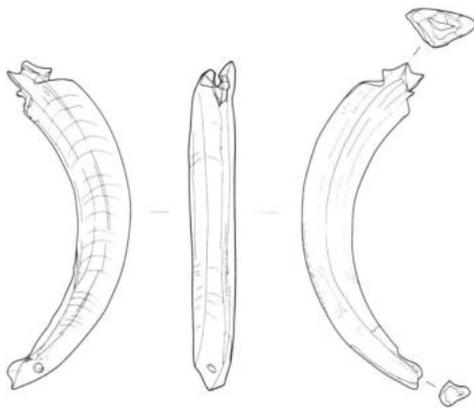
20-7



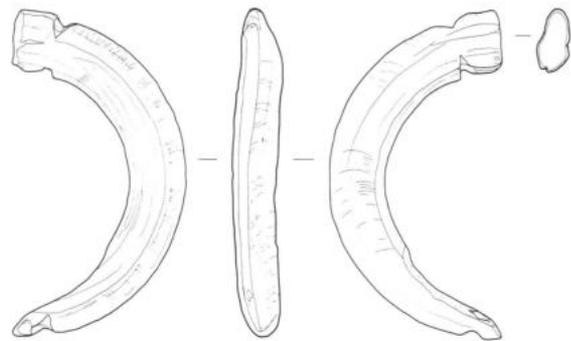
20-6



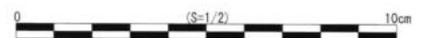
20-5



20-8



20-9



第20図 住居7出土遺物実測図③

第V章 総括

前章までに店舗建設工事及び村道改修工事に伴う古宇利原B遺跡緊急発掘調査の成果を報告してきた。紙面の都合上、十分な成果を掲載することはできていないが、最後に若干のまとめをして結びとしたい。

これまで古宇利原B遺跡では今回も含めて6回の調査が実施され、I群土器(伊波式土器、荻堂式土器)が出土する縄文時代後期末相当期とII群土器(室川式土器、宇座浜式土器)を主体とする縄文時代晩期相当期の2つの時期を主体とする遺跡であることが指摘されている。近年本村教育委員会によって実施した調査では、出土した土器のほとんどが縄文時代後期末から晩期にあたるII群土器であったが、今回の調査ではわずかであるがI群土器が出土し、これまでの古宇利原B遺跡の年代観を裏付ける成果が得られたといえる。特に、道路地区の住居3(S124)ではI群土器が主体的に出土している。ただし、遺構全体を掘削していないので想像の域を出ないが、縄文時代後期相当期には住居を擁する集落を形成していたのではないだろうか。

また、店舗地区の住居7(S21)では住居跡内の岩盤を削った溝状遺構から石斧11点を含む石器13点とイノシシ牙製品が出土した。石斧はほとんどが一部が破損しているか、敲石等に転用されている。検出状況に規格性は認められず住居の廃絶後に廃棄されたものと思われる。

今回の調査では保存状況が良好な住居跡が7基検出された。ただし、調査区の制約もあり全体像を確認できたのは2基のみで、店舗地区から検出された住居6と住居7である。住居6が約3.6m×約2.5m、住居7が4.1m×2.5mの長方形を呈する。いずれも2つの住居跡が切り合っている可能性もあるが、南北に長軸を持つ形で一致する。古宇利島の中央部(北側)に向かって高くなっている地形に合わせ、住居跡の北側で深く掘り込み、南側の掘り込みを浅くし床面を水平にしている。これは2003年度の調査においても指摘されており、掘り込みの浅い南側を入り口として選択している可能性が考えられている。

今回の調査は店舗建設と村道改修工事に伴う発掘調査であった。また、店舗地区の調査に先行して隣接する住宅地区においても発掘調査を実施した。この地区はこれから資料整理作業を行う予定である。今報告では資料整理期間や紙幅の都合上、報告できていない資料も多数ある。今後、古宇利原B遺跡および古宇利島の先史時代を理解するうえでも、住宅地区の資料整理を進めながら隣接する店舗地区、村道地区の資料も合わせて検討することが重要である。

《参考文献》

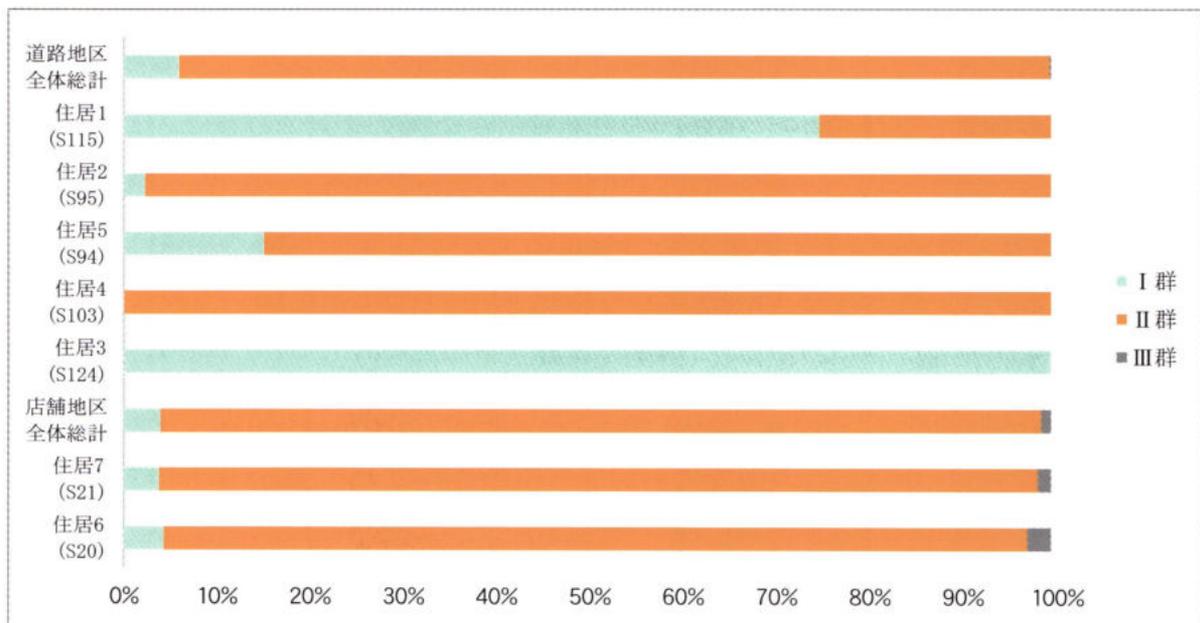
- 目崎茂和 1988年 『南島の地形』 沖縄出版
仲原弘哲ほか 1998年 『すくみち』第32号 今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴史文化センター
津波高志ほか 1982年 『沖縄国頭の村落(上)』 新星図書出版
上原静ほか 1984年 『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10集 今帰仁村教育委員会
金武正紀ほか 1985年 『シヌグ堂遺跡—第1・2・3次発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第67集
沖縄県教育委員会
上原静ほか 1983年 『古宇利原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第8集 今帰仁村教育委員会
青崎和憲ほか 2002年 『ウフタⅢ遺跡』 龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 龍郷町教育委員会
金武正紀・金城亀信 1989年 『宮城島遺跡分布調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第92集 沖縄県教育委員会
金武正紀 1975年 「古宇利島の先史遺跡調査概報」『南島考古』No.4 沖縄考古学会
郷土史研究クラブ 1970年 「古宇利島調査報告」『豊高郷土史』第3号
高宮廣衛 1993年 『沖縄縄文土器研究序説』 第一書房
1983年 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社

第5表 出土土器(口縁部)集計表

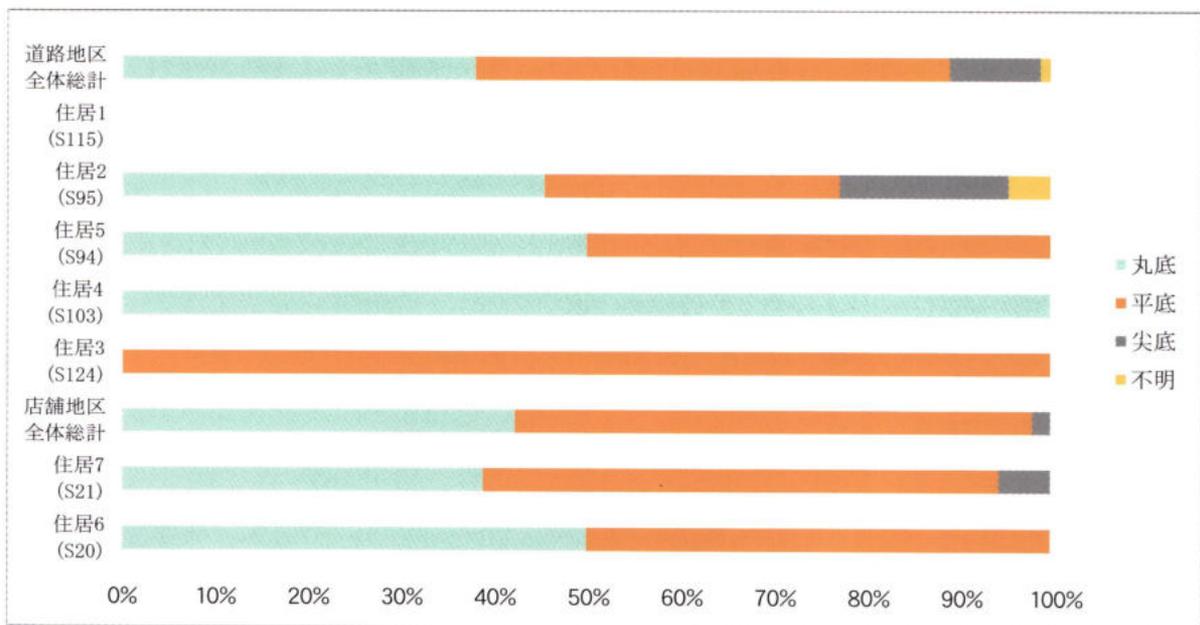
	住居6 (S20)	住居7 (S21)	店舗地区 全体総計	住居3 (S124)	住居4 (S103)	住居5 (S94)	住居2 (S95)	住居1 (S115)	道路地区 全体総計
I群	5	8	26	15		8	4	6	46
II群	109	201	630		27	45	173	2	728
III群	3	3	7						1
小計	117	222	663	15	27	53	177	8	775

第6表 出土土器(底部)集計表

	住居6 (S20)	住居7 (S21)	店舗地区 全体総計	住居3 (S124)	住居4 (S103)	住居5 (S94)	住居2 (S95)	住居1 (S115)	道路地区 全体総計
丸底	2	7	22		1	3	10		35
平底	2	10	29	3		3	7		47
尖底		1	1				4		9
不明							1		1
小計	4	18	52	3	1	6	22	0	56



第21図 出土土器(口縁部)出土比率



第22図 出土土器(底部)出土比率

- 仲原弘哲ほか 1997年 『なきじん研究』vol.7 今帰仁村境域委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 仲原弘哲ほか 1993年 『なきじん研究』vol.3 今帰仁村境域委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 仲原弘哲ほか 1992年 『なきじん研究』vol.2 今帰仁村境域委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 仲原弘哲ほか 1998年 『なきじん研究』vol.8 今帰仁村境域委員会・今帰仁村歴史文化センター
- 上原正依ほか 1963年 「古宇利島調査報告」『沖縄民俗』第8号 琉球大学民俗研究クラブ
- 杉井健 2003年 「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易 改訂版』
熊本大学文学部
- 宮城弘樹ほか 2002年 『長根原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第15集 今帰仁村教育委員会
- 宮城弘樹・玉城靖 2005年 『古宇利原A遺跡－古宇利大橋橋梁整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』
今帰仁村文化財調査報告書第19集 今帰仁村教育委員会
- 玉城靖 2004年 『古宇利原B遺跡発掘調査報告書－村道古宇利横田原線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』
今帰仁村文化財調査報告書第16集 今帰仁村教育委員会
- 宮城弘樹・玉城寿 2006年 『古宇利島の遺跡－村内遺跡発掘調査報告－』今帰仁村文化財調査報告書第22集
今帰仁村教育委員会
- 安里嗣淳ほか 2006年 『西長浜原遺跡－範囲確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第39集
沖縄県立埋蔵文化財センター

図版1 空から見た古宇利島



1. 空から見た古宇利島



古宇利原B遺跡

2. 遺跡位置図



1. 店舗予定地調査完了状況



2. 店舗予定地着手前



3. 店舗予定地包含層検出状況



4. 店舗予定地岩盤検出状況



5. 店舗予定地調査完了状況

図版3
村道改良工事予定地



1. 村道着手前 東から



2. 村道着手前 西から



3. 村道アスファルト撤去状況



4. 村道アスファルト部埋戻し状況



5. 村道作業状況



1. L-28 住居 1 検出状況



2. 住居 1 完掘状況



3. L-28 住居 1 完掘北壁セクション



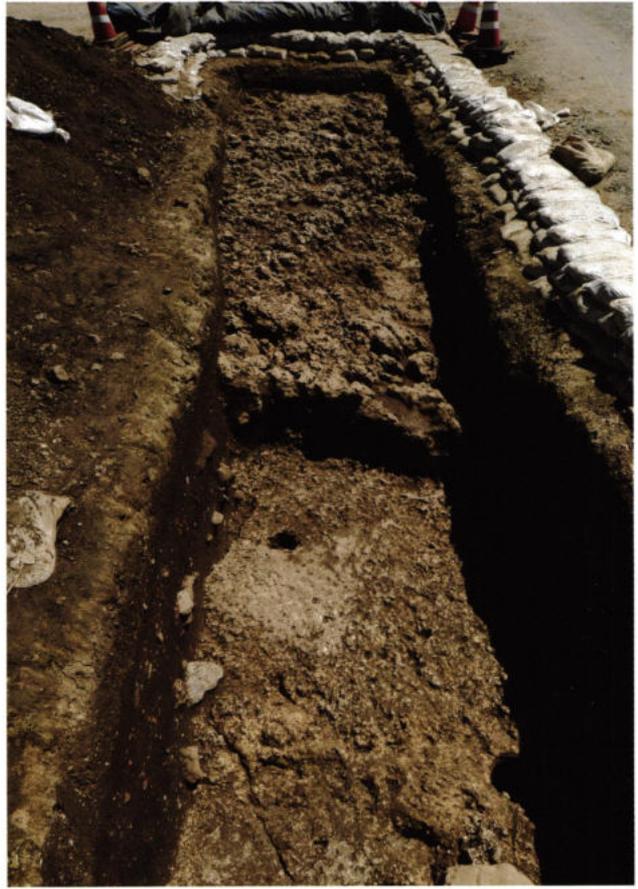
4. L-26 住居 2 検出状況



5. L-28 住居 2 完掘状況



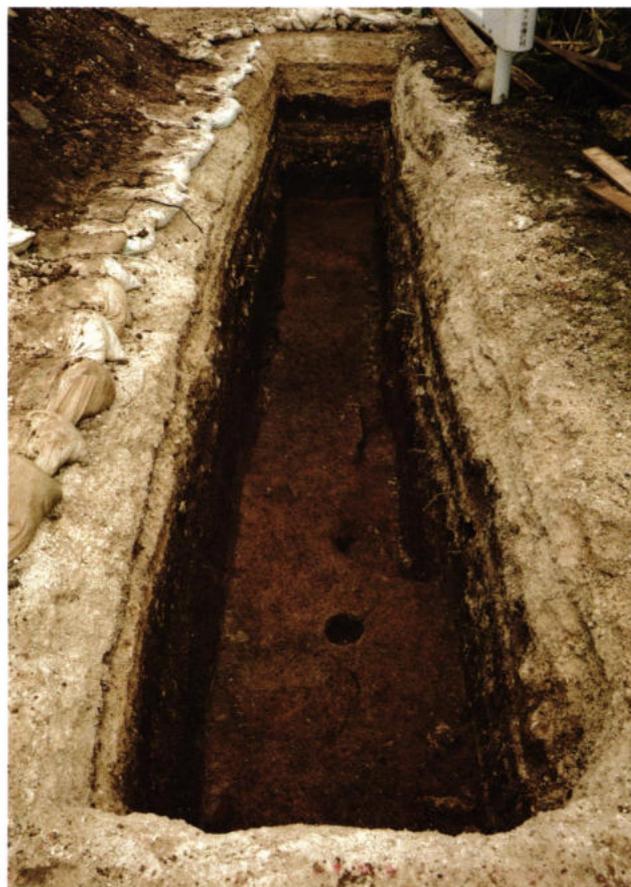
6. L-28 住居 2 完掘セクション



7. L-26 住居 2 完掘状況



1. K-25 住居 3 検出状況



2. K-25 住居 3 完掘状況



3. K-25 住居 3 完掘セクション



1. L-25 住居 4 検出状況



2. L-25 住居 4 礫検出状況



3. L-25 住居 4 礫撤去後



4. L-25 南壁セクション



5. L-25 北壁セクション



1. L-25 住居 5 磔検出状況



2. L-25 住居 5 作業状況



3. L-25 住居 5 炉跡検出状況



4. L-25 住居 5 炉跡断面



5. L-25 住居 5 完掘状況



1. 住居 6・住居 7 拡張後検出状況



2. 住居 6・7 拡張後掘削状況



3. 住居 6・住居 7 完掘拡張部セクション



4. 住居 6・住居 7 完掘状況 北から



5. 住居 6・住居 7 完掘状況 南から



1. 住居 6 検出状況



2. 住居 6 半裁断面 東壁



3. 住居 6 壁石材検出状況



4. 住居 6 北壁



5. 住居 6 拡張後検出状況



6. 住居 6 拡張後東壁断面



7. 住居 6 拡張掘削状況



8. 住居 6 完掘状況



1. 住居6 溝状遺構検出 南から



2. 住居6 溝状遺構検出 東から



3. 住居6 溝状遺構掘削状況 南から



4. 住居6 溝状遺構内より礫検出状況



5. 住居6 溝状遺構内より石皿出土状況



1. 住居7一括石斧出土状況



2. 住居7検出状況 南から



3. 住居7拡張後検出状況



4. 住居7作業状況



5. 住居7完掘状況 北から



18-1



18-2



18-3



18-4



18-5



18-7



18-6



18-12



18-8



18-9



18-10



18-13



18-11



20-1



20-4



20-2



20-5



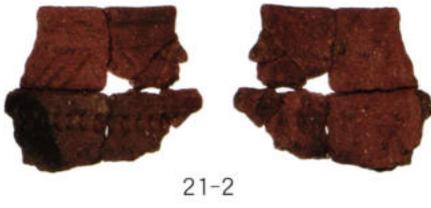
20-7



20-3



20-6



報 告 書 抄 録

ふりがな		こうりばるびーいせきはくつちようさほうこくしょ						
書名		古宇利原B遺跡発掘調査報告書						
副書名		村道古宇利線事業・店舗建設に伴う緊急発掘調査報告						
巻次								
シリーズ名		今帰仁村文化財調査報告書						
シリーズ番号		第34集						
編著者名		與那嶺俊、仲村善洋、仲宗根理沙						
発行機関		今帰仁村教育委員会						
所在地		〒905-0592 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL0980-56-3201						
発行年日		西暦2015年2月20日（平成27年）						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
こうりばるびーいせき 古宇利原B遺跡	な き じん 今帰仁村 こうり 字古宇利	473065		26° 41' 34"	128° 01' 19"	25年度 2014.2 ～ 2014.3 26年度 2014.5 ～ 2014.10	690m ²	店舗建設に伴う 緊急発掘調査 村道古宇利線 事業に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
古宇利原B遺跡	集落	縄文時代 後期から 縄文時代 晩期並行期	竪穴住居跡	土器 伊波式 萩堂式 室川式 宇座浜式 ほか 石器 石斧 叩石 石皿 骨製品 イノシシ牙製垂飾品				

今帰仁村文化財調査報告書第34集

古宇利原B遺跡発掘調査報告書

－村道古宇利線事業・店舗建設に伴う緊急発掘調査報告－

印刷・発行 2015年2月20日

編集 今帰仁村教育委員会
社会教育課 文化財係
TEL 0980-56-3201

発行者 今帰仁村教育委員会
沖縄県国頭郡今帰仁村字仲宗根232番地
TEL 0980-56-3201

印刷 沖縄高速印刷株式会社
沖縄県南風原町字兼城577
TEL 098-889-5513
